

## *As You Like It* における Rosalind の melancholy

村上 世津子\*

(平成 24 年 10 月 31 日受理)

### Rosalind's Melancholy in *As You Like It*

Setsuko MURAKAMI\*

Since Rosalind tries to be merry despite adversity, she appears to be poles apart from the melancholic Jaques. She sharply rejects him when he says to her, "Those that are in extremity of either [melancholy or laughter] are abominable fellows"(4.1.5-6). But if they have nothing in common, why is Jaques interested in Rosalind?

When we closely examine the character of Rosalind, we find that, contrary to her appearance, she is also melancholic. The following lines are most indicative: "Men have died from time to time and worms have eaten them, but not for love"(4.1.97-99). Moreover, it is important to note that Rosalind's melancholy is not temporary but lasts until the end of the play.

Oliver becomes unreliable when he gets back his estate despite having proclaimed that he is willing to surrender everything for his love for Celia. Likewise, contrary to his words, Duke Senior welcomes the news Jaques de Boys brings and is willing to return to the court. Orlando is no exception. Contrary to his words, he extorts food from Duke Senior by drawing his sword. The realization that men's words cannot be trusted silences Rosalind at the end of the play. Thus, Rosalind's melancholy lasts until the end of the play.

Key words: Rosalind, melancholy, Jaques

## はじめに

*As You Like It* (以下 *AYLI* と略す) を読んだ時に引っ掛かりを覚えた箇所がある。4 幕 1 場でふさぎやの Jaques が彼と対照的な性格をしているように見える Rosalind に興味を持ち、彼の方から話しかけることである。Jaques が「私は笑うよりもふさぐほうが好きだ」(4.1.4)<sup>1)</sup> と言うのを聞くと Rosalind は「どちらか一方に偏っている人は人でなしだ」(4.1.5-7) と言う。Jaques が立ち去る時にも Rosalind は激しい言葉を投げつける: 「自分の出自を呪い、こんなご面相に作られたと言って神様をも非難するがよい」(4.1.27-29)。これらの言葉から判断すると Rosalind と Jaques の間には共通点が存在しないように思える。しかしそれなら何故 Jaques は Rosalind に惹かれるのだろうか。Jaques と Rosalind の関

---

\* 英文学 (建築学科) 准教授

本稿は日本英文学会関東支部冬季大会 (2012 年 1 月 7 日 於早稲田大学) で口頭発表されました

係を軸に *AYLI* について考察したい。

## 1. Jaques が話しかける人物

Jaques は自他共に認める「ふさぎや」(4.1.3)で劇の最後で「私は踊りには向かない」(5.4.191)からと言って前公爵の薦めも断り大団円に加わらず、改心した Frederick 公爵の元を訪れるが、彼は必ずしも常に 1 人であることを好むわけではない。2 幕 5 場では貴族たちが歌を歌うのを聞いて楽しい時を過ごす。3 幕 2 場では Orlando に話しかける。さらには 3 幕 3 場では Touchstone が Oliver Martext 立会いの下で「木の下で」(3.3.60)こそそと Audrey と結婚式を挙げてしまおうとするのを知ると「ちゃんとした神父さんを見つけなさい。この男は羽目板をくっつけるように君たちをくっつけるだけだ」(3.3.78-80)という親身で建設的な忠告をする。それでは Jaques はどんな人物との交際を求めるのだろうか。

Jaques が初めて道化に言及するのは 2 幕 7 場である。彼は森の中で出会った道化の言葉を聞いて大喜びする：「ほんの 1 時間前は 9 時であった。そして 1 時間後には 11 時になる。このように人間は 1 時間 1 時間熟していき 1 時間 1 時間腐っていく」(2.7.24-27)。Macdonald(94)や Nevo(285)は、道化のこのセリフは Jaques の態度をパロディするものだと考える。しかし彼らの解釈が正しいなら道化の言葉を聞いて Jaques が大喜びすることは賢い阿呆の放った矢が的を外したことを意味する。重要なことは、Jaques は道化のセリフを心情吐露だと解釈していることである。道化のセリフを聞いて仲間を見つけたと思うから早速公爵に報告するし、Audrey との結婚に関しては皮肉やにも関わらず親身で建設的な忠告をするし、さらには劇の終わり近くで道化のことを「面白い男でしょう」(5.4.51-52)と言って前公爵に推薦するのである。一方 3 幕 2 場で Jaques が Orlando に話しかけた時に Orlando は Rosalind に対して募る恋心を切々と歌った詩を森の木々に刻んでいた。なるほど恋する者の melancholy は Jaques のそれとは異なる(4.1.14)。しかし種類は違っても満たされぬ思いを抱えているという点では Jaques と Orlando の間には共通点が存在する。自分の同類を見つけたと思うから「私と並んで座って 2 人して私たちの女主人である世間をののしり、私たちの不幸の腹いせをしませんか」(3.2.269-71；筆者強調)と話しかけるのである。Jaques が Amiens ら他の貴族たちが歌うのを聞いて楽しい時を過ごすことについても同様の説明がつく。Amiens が歌い、居合わせた貴族みんなが唱和し Jaques がもっと聴きたがる歌の内容は聞き手を“melancholy”(2.5.9)にするものである。4 幕 1 場で Orlando と会話する時の Rosalind の中に Jaques と共通する melancholy—Iyengar によれば「4 つの基本的な気質の 1 つ」(215)で黒胆汁の過多は「なんら明確な理由もなく」(215)「過度な悲しみや無気力」(215)を呈する—が存在することは Barton(166)や Palmer(241)や Leggatt(208)や Barber(235-36)ら多くの批評家に指摘されてきた。とは言え「ふさぎの虫」に取りつかれている Jaques と対照的に Rosalind は逆境にもめげず明るく陽気で前向きな性格をしていると考えるのが定説である。上述の批評家たちも Rosalind の melancholy は一時的なもので基本的には陽気で前向きな性格をして

いると考える。しかし Jaques の方から話しかけている人物は何らかの melancholy を持つことを考慮するなら Jaques が Rosalind と「もっとお近づきになりたい」(4.1.1)と言うのは Rosalind の中に melancholy の要素をかぎつけるからではないか。<sup>2)</sup>ここで注意しなければならないことは、Rosalind の melancholy が露呈するのは Orlando の登場と入れ替わりに Jaques が退場した後だということである。Jaques は Rosalind の強い melancholy が露呈する前に既に彼女の中に melancholy が存在することをかぎつけているのである。とするならば Rosalind の melancholy は 4 幕 1 場の Orlando との会話の場面だけに限定される一時的なものとは言えないのではないか。ここで 1 つ問題がある。それなら何故 Jaques は彼の melancholy の一番の理解者であるように思える前公爵が彼と melancholy の種について議論を交わしたいと思っている時に逃げ回っているのかである。

## 2. Jaques は何故前公爵を避けるのか

Jaques と前公爵の親近性が最も強く打ち出されているように思えるのは手負いの鹿に対する反応である。手負いの鹿を見て Jaques は「自然が彼らに割り当てた居住地の中で鹿を脅して殺すとは、我々は篡奪者に過ぎぬ」(2.1.60-63)と言う。Jaques のこの言葉は前公爵のセリフ「土地の土着の住民なのに... 彼らの領土で... 鋸で... 尻を突き刺されなければならないとは」(2.1.22-25)に呼応しているように思える。前公爵自身、Jaques の考えに同意できるから彼と話をしたいと思う。それなのに Jaques の方が「一日中前公爵を避けてきた」(2.5.29)のは、前公爵は「あまりにも議論好き」(2.5.29-30)だからである。

*AYLI* の底流には *King Lear* に通じるものが存在することを看破したのは Gardner(25-26)である。Arden は Eden ではなく「Adam の罰」(2.1.5)が存在する。すなわち「氷の牙」(2.1.6)は肉に食い込み「冬の風」(2.1.7)は激しく吹き付ける。しかし *AYLI* の前公爵は Lear 王とは異なる。吹きすさぶ嵐の中で Lear 王につき従う従者は阿呆と Kent だけである。それに対して「木々の中に弁論を、流れる小川の中に本を、石の中に説教を発見」(2.1.16-17)することができる前公爵の下には「多くの陽気な者たち」(1.1.110)が付き従っている。森の中に入っていく 3 つのグループのうち 2 つのグループは空腹に直面する。2 幕 4 場では Celia が空腹で倒れそうになる。また 2 幕 6 場では Adam が餓死しそうになる。それに対して前公爵の一行が森の中で空腹に苦しめられる場面はない。生命を脅かす飢えに直面することもなく、おまけにストイックな性質まで兼ね備えている前公爵は Adam の罰を体験しても、喚き、怒鳴り、のた打ち回らなくてはいけない事態に追い込まれたと感ぜないのである。前公爵の体験は知覚の段階にとどまり感情の奥深くまで食い込むものではないから「[冬の厳しさは]己の何たるかを身をもって教えてくれる忠義者だ」(2.1.10-11)と思うし「慣れればここでの生活の方が宮中の華やかな生活よりも甘美だ」(2.1.2-3)と主張するのである。

Jaques が前公爵のことを「付き合うにはあまりにも議論好き」と感じる理由はまさにここにある。前公爵は「運命の過酷さ」(2.1.19)を「そんなにも静かで甘美なもの」(2.1.20)に変えることができる有徳の士である。対するに Jaques はあちこち旅してきて「経験を手に入れた」(4.1.23)もののその経験は彼を「憂鬱にした」(4.1.24)だけのしがたない漂泊者

である。落伍者たる Jaques にできることは悲しみに浸り、運命の女神の悪態をつき、憂さ晴らしをするだけである。Jaques には「運命の過酷さ」を「そんなにも静かで甘美なもの」に変えることなどできないのである。できないだけではない。しようもしないし、したいとも思わないのである。melancholy の種をありのまま受け止め、運命の女神に悪態をつきつつもそれをとことん噛みしめ味わい尽くしたいのである。だから劇の終わりで Frederick 公爵が遁世して彼が篡奪した地位も財産も前公爵に返すと前公爵は公爵に復位し宮中に戻ることが示唆されているのに我が身の不幸を嘆き運命の女神の悪態をついていた Jaques は森の中にとどまることを選ぶのである。

このことを念頭において 4 幕 1 場の Jaques と Rosalind のやり取りを読み直すと彼女が melancholy を全面的に否定しているわけではないことに気づく。Jaques の「私は笑うことよりもふさぐことの方が好きだ」というセリフを受けて Rosalind は「どちらか一方に偏っている人は人でなしだ」と言う。ここで注意しなくてはならないのは「melancholy にとりつかれている人は」と言わずに「どちらか一方に偏っている人は」と言うことである。つまり彼女は人間には笑いと melancholy の程良いバランスが肝要だと言っているのである。Jaques と別れ際の Rosalind のセリフも吟味する必要がある。漂泊の旅を通して経験を積んだと言う Jaques の言葉を聞いて Rosalind は「僕なら経験を積んで憂鬱になるよりも陽気にしてくれる阿呆と一緒にいる方がいいね」(4.1.24-26)と言う。だがもし彼女に melancholy な気分が存在しないなら「陽気にしてくれる阿呆」など必要であろうか。Jaques は Rosalind の「引き立て役」(Edward Berry 43)どころか Rosalind は自己の中に強い melancholy が存在することを自覚しているから笑いと melancholy の均衡を維持するために Jaques を切らなくてはならないのではないか。Jaques に引きずられそうになる気持ちに打ち克つために「自分の出自を呪いこんなご面相に作られたと言って神様をも非難するがよい」という激しい言葉が必要なのではないか。

### 3. Rosalind の melancholy

2 幕 4 場で Arden の森に着いた時の Rosalind の第一声は「気力もなえてしまったわ」(2.4.1)である。この後すぐ彼女は「男の衣装は女の衣装に勇気のあるところを見せなければいけない」(2.4.4-7)と言って勇気を奮い起こす。彼女自身の気力がなえて泣き出したいくらいなのに勇気を奮い起こして Celia を励まそうとするストイカルな態度は 2 幕 1 場で「運命の過酷さをそんなにも静かで甘美なもの」に変えた前公爵の態度を想起させる。しかし 2 幕 1 場 1-17 行の前公爵のセリフと 2 幕 4 場 4-8 行の Rosalind のセリフを比較すると類似性の背後に相違が存在することに気づく。前公爵が「運命の過酷さをそんなにも静かで甘美なもの」に変えることによって「運命の過酷さ」を消し去っているのに対して Rosalind は彼女自身の気力がなえ、泣きたいくらいであることをはっきり認識しているからである。

ともすれば変装による安全圏の高みから素のままの Orlando を痛める印象を与えかねない Orlando との会話の中にも Rosalind の melancholy が存在する。真剣な恋をしているにも関わらず Rosalind が Orlando の主張する恋を疑問視し、彼を苦しめてでも恋の真



実を試そうとするのは目の前にいる Orlando が Rosalind に対する熱烈な恋を表明しても彼女の不安が解消されないからである。「木の皮に Rosalind と彫って若い木を痛めつけたりサンザシに頌歌をキイチゴに哀歌をぶらさげる」(3.2.347-49)男が「恋の毎日熱にかかっているように見える」(3.2.351-52)ことは彼女の認めるところである。しかし「見える」とと「実際にそうである」ことは異なる。恋の病を治療してやると誘いかけることによって彼女は Orlando に「世俗的な生活を捨てて人里離れた場所に」(3.2.401-403)住まない限り平安を取り戻せないような「本物の狂気」(3.2.401)に突き落とす恋の重荷を引き受ける覚悟の程を聞くのである。ここで注意しなくてはならないのは「暗い部屋と鞭」(3.2.385)の荒治療を施さない理由として「鞭打つ者も恋している」(3.2.387-88)ことを挙げていることである。Rosalind は一般論として述べている。しかし Orlando の治療をするのが彼女であることを考慮するなら彼を鞭打つ者、すなわち彼女自身も恋をしていると言っていることを忘れてはならない。

3 幕 4 場で Celia と 2 人きりになった時に Rosalind は「男に涙は向かない」(3.4.3)が泣きたいと言う。来ると約束したのに Orlando が姿を見せないからである。3 幕 2 場で Orlando を前にして「他者を恋しているというよりも自分自身を恋しているように見える」(3.2.368-69)と言い放った時の強気な態度はここでは見られない。恋の病に苦しむ Rosalind を Celia が茶化して Orlando の誠実を疑問視する言葉を口にすればするほど Rosalind は彼女のことを恋していると言った Orlando の言葉にしがみつきたいと思う。しかし「彼は... 立派な誓いを立てるが恋人の心を横切って[誓いの言葉を]破る」(3.4.36-38)という Celia の言葉は Rosalind の心に突き刺さる。約束の時間になってもなかなか姿を見せない Orlando に対して Rosalind がやきもきして泣きたい気持ちでいると Orlando は 4 幕 1 場で悪びれもせず彼女の前に姿を現す。怒り心頭に発している Rosalind に「それでも恋人なの。もう一度こんな卑劣な仕打ちをするなら二度と私の前に姿を見せないで」(4.1.36-37)と言われても Orlando は「約束の時間に 1 時間遅れただけじゃないか」(4.1.38-39)と答え反省の素振りも見せない。

Rosalind が変装しているのに対して Orlando は素のままであるから一見したところ彼女の方が Orlando よりも有利な立場にいるように見える。しかしことはそれほど単純ではない。Rosalind は Orlando が Orlando であることを知っているから彼の愚行を茶化し恋愛ごっこを演じているように見せかけている時でも真剣に全力で恋人にぶつかっている。しかし Orlando は目の前にいる Ganymede が正真正銘の Rosalind であることに気づかない。Orlando にとって Ganymede はあくまで彼の恋の苦しみを癒してくれる Rosalind の代役を勤める牧場主の少年に過ぎないのである。本物の Rosalind に対する本気の恋とは思っていないから約束に遅れても平気なのである。

4 幕 1 場で散々待ちぼうけを食わされた Rosalind は初め「こんなに待たせるなら... カタツムリに口説かれる方がマシだ」(4.1.46-47)という辛辣な言葉を Orlando に投げつけるものの彼のそばにいられる喜びが彼女の気分を浮き立たせて彼に彼女を口説くように薦める。ただし戯れの恋を装っている Rosalind は Orlando に自分を口説くように誘いかけておきながら「あんたなんかと一緒になりたくない」(4.1.84)と言う。Orlando が「それなら

私は当の本人として死にます」(4.1.85)と言うと「代理人に死んでもらえ」(4.1.86)と答えて「世界は開闢以来 6000 年になるがその間に[恋が原因で]自ら死んだ男など 1 人もおらぬ」(4.1.86-89)と続け、世間で恋人の鑑と評されている Troilus や Leander でさえ恋のために死んだわけではないと主張する。Orlando に「本物の Rosalind にはこんな考え方をしてもらいたくない」(4.1.100)と言われると Rosalind はすぐに陽気を取り戻す。しかし後述するように「恋故に死んだ者はない」と言う徹底的な男性不信は「Rosalind が自分のものになった後いつまで彼女を手元に置いておきますか」(4.1.134)というセリフ以下の Orlando と彼女のやり取りの中で形を変えて執拗に追求されている。Rosalind は Orlando が想像する女神のように美化された Rosalind 像からほど遠い「やきもち焼き」(4.1.140)で「かしましく」(4.1.141)で「すぐに新しいものに飛びつき」(4.1.142)「気まぐれ」(4.1.142)で夫が陽気な気分にいる時に「なんでもないことに滂沱の涙を流」(4.1.143)し、夫が眠りたい時に「ハイエナのようにけたたましく笑う」(4.1.145)Rosalind 像を突きつける。それどころか浮気者である可能性をさえ突きつけるのである。彼女が提示する Rosalind 像に恐れをなした Orlando が「公爵の夕食に招かれている」(4.1.168)ことを口実に 2 時間ほど下गरせて欲しいと申し出ると Rosalind は早速やきもち焼きのところを見せて「もしあなたが約束の時間に 1 分でも遅れたらこの上もない約束破りの不実な恋人」(4.1.178-81)だと言うと言って追い討ちをかける。彼女の剣幕に気圧された Orlando は「あなたが本物の Rosalind だった場合と同様の誠実さで持つて」(4.1.185-86)と答えて退場する。

Orlando が退場すると Celia は Rosalind に「あなたの恋にのぼせ上がった無駄話のお陰で女の慎みが台無しにされたわ」(4.1.189-90)と不平をもらす。しかし Celia の言葉に反してここでの彼女の話は「恋にのぼせ上がった無駄話」と対極に位置するものである。彼女を称える Orlando の詩を見つけて以来 Rosalind が一番警戒してきたのが Orlando の「恋にのぼせ上がった無駄話」である。Rosalind は「恋は狂気」(3.2.384)だと考える。しかし彼女が考える「恋は狂気」は *A Midsummer Night's Dream* の中で Theseus が主張するような「想像力でありもしないものを作り上げて冷静な理性が理解できないことを思いつく」(5.1.5-6)恋人たちの狂気とは以って非なるものである。それは現実を直視し、分別の目で見たら見放したくなるものに最後まで連れ添い愛しぬくことである。男装した Rosalind 扮する Ganymede が Rosalind を演じることで間に 2 重のクッションを挟んでいるので素のままの Rosalind が見せたら生々しすぎてとても観客に受け入れられない彼女の心の底の底に潜んでいる魔性まで抉り出して Orlando に突きつけることができる。模擬結婚式の後の Rosalind のセリフは「Rosalind が自分のものになった後いつまで彼女を手元に置いておきますか」(4.1.133-34)という問いに始まって『永遠に』は抜きにして『1 日』と言いなさい」(4.1.136);「1 人の女が捨てられたまでのこと」(4.1.174);「もしあなたが少しでも約束を破るなら」(4.1.178);「約束破り」(4.1.180)等彼女が捨てられたり裏切られたりすることに関する言葉に満ちている。「恋にのぼせ上がった無駄話」どころかそれは彼女を美化して陽気で美しい側面だけを見ていた恋人が結婚して生活を共にすることによって彼女の思わず目を背けたくなるような醜い側面を知った時に恋人に捨てられる可能性を見据えた真剣勝負のセリフである。Rosalind は Orlando に「富める時にも病める時にも」(*Book*

of *Common Prayer* 291)連れ添ってくれる覚悟があるか問い質しているのである。

Rosalind に暇乞いをする時に Orlando はまだ彼女が本物の Rosalind であることに気づいていない。しかし 4 幕 1 場の初めで約束の時間に遅れてきたことをなじられても悪びれもしなかった Orlando がこの場面の終わりで暇乞いをする時には「宗教的な敬虔さでもって」(4.1.185)という神妙な答えをする。そして彼女と別れた後で兄に襲いかかろうとした雌ライオンを成敗する時に自らも負傷し彼女の元に行けなくなると証拠の「血染めのハンカチ」(4.3.154)を兄に託して Rosalind に届けてもらう。本物の Rosalind でないと思っっているにも関わらず Orlando がそこまで誠意のある対応をするのは自らの心の奥底を曝け出した Rosalind の真剣な問いに反応しているからである。Orlando にとって Ganymede が扮する Rosalind はもはや本物の Rosalind の代わりではない。女神のような美貌と聡明さを持つ一方で奈落をも垣間見せる一個の人格を持った魅力的な存在に転じているのである。

#### 4. 劇の終わりの Rosalind の melancholy

以上議論してきたように Rosalind の思考の底流には Jaques を凌ぐ強い melancholy が存在するが Rosalind と Jaques に共通している事柄は他にもある。この劇の終わりで Jaques は Frederick が改心して世捨て人の生活に入ったことを聞くと彼の元に行くことを選択するが、この劇の中で世捨て人の話を聞くのは Jaques だけではない。Rosalind も同様である。しかも Rosalind と世捨て人との関係は Hattaway らが指摘するように(194)劇中で 3 度も言及されている：「年取った世捨て人の叔父が言葉使いを教えてくださいました」(3.2.332)；「私は 3 歳の時から魔法使いと関わりを持ってきました。」(5.2.59-60)；「この少年は... 叔父から多くの危険な学問の基礎を学んだそうです... 叔父は偉大な魔術師でこの森の中に隠れ住んでいるそうです」(5.4.30-34)。しかもその内の 2 回は劇の終わり近くで言及されていて Rosalind と世捨て人の結びつきがまだ観客の頭の片隅に残っている時に Frederick 公爵が改心して世捨て人の生活に入ったことを聞いた Jaques が彼の元に行くと言うのである。Milward らが指摘するように Rosalind が「学問の基礎」を学んだ「年取った世捨て人の叔父」と劇の終わりで Frederick 公爵が出会った老僧が同一人物である(117)なら Rosalind と Jaques は同一人物から感化を受けることになり 2 人の結びつきがよりいっそう強固なものになる。

Jaques と Rosalind の類似性を頭に入れて *AYLI* を読み直すと意外な事実気づく。Hymen 立会いの下で恋人たちが夫婦の契りを結んだ以降恋人たちの中で声が聞かれるのは Phoebe だけである：「約束は破りません。あなたの誠実さが私の気持ちをあなたと結び付けてくれました」(5.4.146-47)。Phoebe の言葉は 3 幕 5 場で恋人の求愛をはねつけただけでなく彼の誠実さを利用して Rosalind への恋文を届けさせた時の態度と対照的に恋人の誠実さを認め彼の求愛を受け入れる点においてロマンス劇の終りにふさわしいもののように思える。しかし「約束は破りません」という言葉には「私が本当に心から結ばれたかった相手ではないけど約束した以上仕方がない」という気持ちがにじみ出ている。Phoebe の耳には「売れる時に売っておけ。お前さんはどこに出しても売れる玉じゃない」(3.5.61)

という Rosalind の言葉が響いていたであろう。

劇の終りで恋人たちの声に代わって聞かれるのは Jaques de Boys と前公爵と Jaques の声である。Jaques de Boys は前公爵を亡き者にするために軍を率いてきた Frederick が森のはずれで老僧に出会い、その話を聞いて改心し領土と地位を前公爵に返し世捨て人になる決心をしたことを告げる。よき知らせを聞いた前公爵はまず結婚の式典をやり遂げ、次に彼と共に辛く厳しい日夜を耐え忍んでくれた者たちに彼が再び手にした幸運の果実を分け与えることを約束する。そして Jaques は踊りの輪には加わらないもののそれぞれのカップルにお祝いの言葉を述べて退場する。悪人は自ら断罪し善人の労は報われ結婚の式典が挙行される。完璧な喜劇のシナリオの完成である。にもかかわらず観客の胸には不安がよぎる。踊りの輪に加わることを拒否する Jaques が喜劇の結末に水を差すことは言うまでもない。しかしそれだけではない。完璧な喜劇の結末を保証する言葉であるかのように思える前公爵のセリフそのもののの中に観客に不安を与える要因が潜在するのである。有徳の士である前公爵が公爵に復位し宮中に戻れば「あらまほしき社会」が到来することが予想される。にもかかわらず観客の胸に不安がよぎるのは前公爵が森を去ることに何の未練も感じないからである。前公爵自ら「慣れればここでの生活の方が宮中の華やかな生活よりも甘美だ」と主張しその言葉を聞いた貴族も「私もここでの生活を変えたいとは思いません」(2.1.18)と唱和していたのは強がり過ぎなかったのかという感情を抱かせられるからである。それでも前公爵は弟に地位を篡奪された被害者だし有徳の士であることが証明されているから観客は一瞬軽い失望感を覚えるにとどまる。よりいっそう問題なのは Orlando の才能と人気を妬み彼を亡き者にしようと謀っていた Oliver が没収された土地を取り戻し、都に戻ることを示唆されていることである。弟を亡き者にしようと謀るような人物は、父が従姉にした仕打ちを恥じ、従姉のために地位も名誉も投げ打ち自らも追放の身となって従姉に同行する心優しい Celia と結ばれることは不釣り合いである。唯一その不釣り合い感を緩和する働きをしていたのは Oliver の次のセリフである：「父から譲り受けた土地も財産もお前に譲渡し死ぬまでここで羊飼いとして暮らすつもりだ」(5.2.10-12)。愛する者のためには地位も名誉も投げ捨てるという意思表示をしたから観客は「私がどんな人間であったかお話しすることを恥だとは思いません。心を入れ替えたことがそんなにも快く感じられるからです」(4.3.133-36)という言葉信じ、Oliver は Celia にふさわしい男性に生まれ変わったと思うことができた。この劇の終りで没収された土地を取り戻し「この身にとっては娘も同然」(5.4.145-46)であることを前公爵が認める妻を娶り他のカップルたちと共に都に戻るなら Oliver の言葉は行動を伴わない空疎なものになる。Hymen 立会いの下で夫婦の契りを結ぶまで饒舌であった Rosalind の声が劇の終りで聞かれないのはこのことと無縁ではない。4 幕 1 場で Rosalind の憂鬱の原因は「恋をしている男の誓言は酒場の給仕の言葉と同様、当てにならない」(3.4.27-28; cf. 4.1.171-72)ことにあった。

なるほど Orlando は Oliver とは異なる。Oliver が弟の命をつけ狙う悪人であったのとは対照的に Orlando は「立派な品性を備えていてあらゆる人々に愛されている」(1.1.156-57)人物である。彼の勇気は Frederick 公爵お抱えの力士である Charles とのレスリングの試合で証明されているし、彼の優しさは疲れと空腹から動けなくなってしまった老僕 Adam



のために食べ物を捜しに出かけ、前公爵ら一行に遭遇し食事を勧められた時にいったん Adam のところに帰り彼を背負って現れることによって証明されている。そして何より勇氣と優しさの両方が彼の命をつけ狙っていた兄が雌ライオンに襲われそうになっているのを見た時に危険をも顧みず雌ライオンと戦うことによって証明されている。これらの点を認めた上で Orlando も前公爵や Oliver に潜在する弱さと無縁でないと言わなければならない。それどころか Orlando の弱さは今挙げた彼の優しさの証明の中に潜在しているのである。前公爵ら一行が食事をしようとする場面に抜き身の剣をかざして闖入し、食事を出せと要求して前公爵から礼にかなった対応を受けた時に Orlando は非礼を詫びて「ここでは万事野蛮だと思ったので恐ろしい形相をして要求を突きつけました」(2.7.108-110)と言う。この言葉は Orlando が信念に基づいた不変の行動をするのではなく彼の行動は状況次第で変わりうることを示唆している。あたかも Orlando を含めた恋人一般の弱さを観客の潜在意識に刻みつけようとするかのように Orlando が Adam を背負って登場し、Adam をかいがいしく介抱する感動的な光景が舞台上で提示された後で前公爵が Amiens に命じて歌わせる歌のリフレインの中で「ほとんどの友情は偽りでほとんどの恋は愚かさ過ぎぬ」(2.7.182; 192)という言葉が繰り返される。

劇の終りの前公爵や Oliver にせよ 2 幕 7 場で非礼を詫びる Orlando にせよ積極的に他者を裏切ろうとしたり貶めようとしたりはしない。これは「結婚が結びつけ、情欲が裂くのに従って誓いを立てたり破ったりする」(5.4.56-57)と公言して憚らない Touchstone や改心前の Frederick や Oliver の行動との大きな違いであり、このことはいくら強調しても強調しすぎることはない。しかしながら 4 幕 1 場で顕在化した Rosalind の melancholy の核心に存在する男性不信は男性の積極的な悪や裏切りに根ざすものではない。恋人の鑑と評されている Troilus や Leander でさえも「恋故に死んだわけではない」ことに根ざしているのである。なるほど Orlando は前公爵の信頼を勝ち得ている。1 幕 2 場で道化がパンケーキと辛子について事実と反する証言をしたのは「老 Ferdinand 公爵お気に入りの騎士」(1.2.80-81)だと言った時に Rosalind は「父のお気に入りならその方が立派だと証明するのに充分です」(1.2.82)と言った。しかし「慣れればここでの生活の方が宮中の華美な生活よりも甘美だ」と主張していた前公爵が劇の終わりで状況が変われば森での生活に何の未練も示さず嬉々として都に戻ることを示唆されていることは、前公爵の言葉も絶対不変とは言えないことを示唆している。「父のお気に入りならその方が立派だと証明するのに充分」だとは断言できなくなっているのである。

劇の終りで Hymen 立会いの下で夫婦の契りを結んだ後の Rosalind の沈黙が彼女の melancholy と関係があるにしても epilogue でこれまで以上に饒舌で生き生きとした姿を見せ観客の注目を一身に浴びる Rosalind をどう解釈するのかという反論があるかもしれない。なるほど Rosalind は Orlando の新婦として花嫁姿で収め口上を言う。しかし「乞食の衣装をまといていない」(筆者強調;9)という言葉や「もし私が女なら」(16-17)という言葉は登場人物であると同時に役者であり、女であると同時に男である両義的な存在としての Rosalind を観客に印象付けるものである。この両義性こそが epilogue での Rosalind

の魅力の源であり Orlando の新婦としての Rosalind が舞台上で生き生きとした姿を見せ  
ているわけではないのである。さらには「呪文をかける」(11)という語も要注意である。  
Hattaway(197)や Oliver(153)らが指摘するように「呪文をかける」は「魔術師」と結びつ  
きの強い語である。Rosalind と魔術師の結びつきは魔術師でもある世捨て人の叔父の存在  
を喚起する。つまり劇中で示唆された「年取った世捨て人」を介する Rosalind と Jaques  
の結びつきが epilogue の中でも念押しされているのである。

## 結び

以上議論してきたように逆境にめげず明るく陽気に生きようとする Rosalind はふさ  
ぎやの Jaques と対極の存在であるかに見えるが Rosalind の中にも Jaques と共通する  
melancholy が存在する。しかもその melancholy は着脱可能な一時的なものではなく劇  
の最後まで持続するものである。ただし Jaques と Rosalind の間には大きな違いがある。  
Jaques は「運命の過酷さ」を「そんなにも静かで甘美なもの」に変えようとしないうし変  
えたいとも思わない。Jaques 同様 Rosalind も「運命の過酷さ」を「そんなにも静かで  
甘美なもの」に変えてしまうことはできない。しかし彼女は「運命の過酷さ」を消し去  
ることはできなくてもより快適なものに変えようと努力する。憂鬱に身を浸す代わりに  
「陽気にしてくれる阿呆と一緒に」いて憂鬱を紛らす方を選ぶのである。Rosalind は「恋  
人の鑑」と評されている Troilus や Leander でさえ状況に即した行動しか取れないのと  
同様に Orlando もまた環境の影響から完全に自由であることはできないことを知って  
いる。このことは劇の終りで彼女を沈黙させる。しかし Rosalind は「どこに出しても  
売れる玉」でなければ「売れる時に売っておく」のが賢明だと考える現実主義者である。  
Rosalind は沈黙しても失望はしない。彼女はほろ苦さを感じつつも踊りの輪に加わり、  
公爵に復位した前公爵やお付きの者や他の恋人たちと共に都に戻るであろう。Rosalind  
の melancholy は着脱可能な一時的なものではなく劇の終わりまで存在し続けるが  
Jaques のそれと異なり潜在的なものに留まるのである。

## 注

<sup>1)</sup>テキストは The Arden Shakespeare *As You Like It*, ed. Juliet Dusinberre (London: Thomson, 2006)を使用した。

<sup>2)</sup>1987 年の RSC の作品で Rosalind 役をした Sophie Thompson は「Rosalind として私は Jaques に非常に興味を持った。... 私は Rosalind の中に強い melancholy があると思った... だから Jaques が彼女に興味を持った」(83)と述べている。

## 引用/参考文献

Barber, C. L. *Shakespeare's Festive Comedy: A Study of Dramatic Form and its Relation to Social Custom*. 1959. Princeton: Princeton UP, 1972.

Barton, Anne. "As You Like It and Twelfth Night: Shakespeare's Sense of Ending." *Shakespearean Comedy*. Ed. Malcolm Bradbury and David Palmer.

- Stratford-upon-Avon Studies 14. London: Arnold, 1972. 160-80.
- Berry, Wendell. "The Use of Adversity." *The Sewanee Review* 115. 2 (2007): 211-38.
- Berry, Edward I. "Rosalynde and Rosalind." *Shakespeare Quarterly* 31 (1980): 42-52.
- The Book of Common Prayer 1559: The Elizabethan Prayer Book*. Ed. John E. Booty. 1976, Washington: Folger Shakespeare Library, 1978.
- Dusinberre, Juliet. Notes. *As You Like It*. By William Shakespeare. The Arden Shakespeare. London: Thomson, 2006.
- Garber, Marjorie. *Shakespeare After All*. New York: Anchor, 2004.
- Gardner, Helen. "As You Like It." *More Talking of Shakespeare*. Ed. John Garrett. London: Longmans, 1959. 17-32.
- Hattaway, Michael. "The Condition of the Country." Introduction and Notes. *As You Like It*. By William Shakespeare. Cambridge: Cambridge UP, 2000. 21-25.
- Honigmann, E. A. J. *Shakespeare: Seven Tragedies Revisited: The Dramatist's Manipulation of Response*. Basingstoke: Palgrave, 2002.
- Iyengar, Sujata. "melancholy." *Shakespeare's Medical Language: A Dictionary*. Continuum Shakespeare Dictionary Series. New York: Continuum, 2011.
- Leggatt, Alexander. *Shakespeare's Comedy of Love*. 1974. London: Methuen, 1980.
- Macdonald, Ronald R. *William Shakespeare: The Comedies*. Twayne's English Author Series. New York: Twayne, 1992.
- Mangan, Michael. *A Preface to Shakespeare's Comedies: 1594-63*. London: Longman, 1996.
- Milward, Peter. "Religion in Arden." *Shakespeare Survey* 54 (2001): 115-21.
- Nevo, Ruth. *Comic Transformation in Shakespeare*. London: Methuen, 1980.
- Oliver, H. J. Commentary. *As You Like It*. By William Shakespeare. 1968. London: Penguin, 2005. 109-53.
- Palmer, D. J. "As You Like It and the Idea of Play." *The Critical Quarterly* 13 (1971): 234-45.
- Shakespeare, William. *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre.
- *A Midsummer Night's Dream*. Ed. Harold F. Brooks, The Arden Shakespeare. London: Methuen, 1979.
- Thompson, Sophie. "Rosalind (and Celia) in As You Like It." *Players of Shakespeare 3: Further Essays in Shakespearian Performance by Players with the Royal Shakespeare Company*. Ed. Russell Jackson and Robert Smallwood. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Traub, Valerie. *Desire and Anxiety: Circulations of Sexuality in Shakespearean Drama*. London: Routledge, 1992.